

[Report]

Relationship between self-efficacy and Big Five personality in hygiene nursing students

Aiko Ueda*, Yuki Tanaka* and Ayumi Nishigami**

* First department of nursing, Aino university junior college

** Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Aino University

Abstract

Students studying health nursing in high school are forced to study nursing subjects in addition to their regular subjects, and often lose sight of the goals they set when they first entered the program due to the many challenges they face. One of the reasons for this is a decline or stagnation in self-efficacy. Although self-help efforts are fundamental to enhancing self-efficacy, it has been suggested that it can be enhanced through educational efforts. On the other hand, personality traits, which have been used to predict human behavior, are considered to be highly variable until the late teens. In this study, we investigated the relationship between self-efficacy and personality traits, and found a positive correlation with “extraversion” and a negative correlation with “neuroticism” among the personality traits.

Key Words: Big Five personality, self-efficacy, hygiene nursing students, basic nursing education

衛生看護科生徒における自己効力感と Big Five 性格特性との関連

上 田 愛 子*, 田 中 裕 樹*, 西 上 あゆみ**

【要 旨】

高等学校の衛生看護科で学ぶ生徒は、普通教科の学習に加え看護専門教科の学習を余儀なくされており、多くの課題に翻弄され、入学当初の目標を見失ってしまうことが少なくない。原因として自己効力感の低下や低迷があげられる。自己効力感を高めるのは自助努力が基本であるが、教育的取り組みにより高められることが示唆されている。一方、人間の行動を予測するために用いられてきた性格特性は、10代後半までの変動が大きいとわれている。今回、自己効力感と性格特性の関連を調査し、性格特性の中の「外向性」と正の相関、「神経症傾向」と負の相関がみられた。

キーワード：Big Five 性格特性、自己効力感、衛生看護科生徒、看護基礎教育

緒 言

高等学校における看護教育は、昭和39年の衛生看護科の設置で始まった。その後、衛生看護科の在り方が検討され、平成14年には2年間の専攻科を加えた5年一貫看護師課程が開始された。又、平成28年からは、専攻科修了生の看護大学への編入も可能となった。現在の高等学校の専門学科においては、職業の多様化、職業人として求められる知識・技能の高度化への対応がもたれている。このため、職業人としての自己学習力や社会の中で自らのキャリア形成を計画・実行できる力等を育成していくことが必要である(中教審, 2011)と述べている。今回の研究対象は、高等学校衛生看護科生徒である。看護師になるという夢と希望をもって入学してきたにも拘わらず、学習意欲の低下を来し、入学当初の目標を見失ってしまう

ことが少なくない。普通教科の学習に加え看護専門教科の学習を続けるのは楽しいことばかりではなく、多岐にわたる専門科目の修得という課題に持続的に取り組んでいかなければならない。市村ら(2019)が行った実験研究により、課題遂行場面における課題の解決を諦めるという行動(以下、諦め行動)が、課題への取り組みの持続性や自己効力感を低下させることが示されている。自己効力感を高めるのは自助努力が基本であるが、教育的取り組みにより高められることが示唆されている。本研究で取り上げたのが、その一つである一般性自己効力感(坂野・東條, 1986)で、これが高くなると、自分の技能や腕前を信じ、前向きな気持ちで物事に取り組めるようになることが報告されている。

一方、自己効力感理論が登場するずっと以前から、人間の行動を予測するために用いられてきた変数が性

* 藍野大学短期大学部 第一看護学科

** 藍野大学医療保健学部看護学科

格特性である。性格特性における Big Five は 1980 年代以来、欧米中心に論じ始められた（柏木，1997）。この種の性格特性研究は、性格特性に関する語彙を辞書から収集し分類整理する心理辞書的方法で、Allport & Odbert（1936）に端を発する。近年様々な領域において、少数の項目で心理学的構成概念の測定する尺度が作成されている中、本研究で使用する日本語版「TIPI-J」は、小塩が作成し、性格心理学の分野で合意が得られている概念であり、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の 5 つで構成されている。

性格特性は不変性が高いとされているが、Soto, John, Gosling & Potter（2011）は、児童期から 10 代後半までの変動は大きく、それ以降は急激な変化は生じない傾向があると述べている。

職業科で学ぶ高校生についての自己効力感の先行研究を概観すると、性格特性との関連に焦点を当てた研究は見当たらない。自己効力感について明らかにされているのは、「成功体験（遂行行動の達成）」が最も安定した自己効力感を得ることに繋がる点である。又、国内における Big Five との関連についての研究を概観しても、健康行動との関連等が明らかにされているが（平野，2021）、一般性自己効力感と Big Five の関連性については、十分に研究されていない。

一方、性格特性には個人差があり、「成功体験を元に自己効力感を高めることが比較的容易な者」と、「成功体験がすぐには自己効力感の向上に結びつかない者」がいることが予測できる。そのため、教育的な取り組みとして個々の生徒のもつ性格特性を十分に考慮した上での指導が必要であるのではないかと考える。

研究目的

一般性自己効力感の低下や低迷が、Big Five 性格特性の何と関連が深いのかを明確にし、自己効力感を高める教育方法開発の基礎研究とするところである。

研究の概念的枠組み（図 1）

自己効力感の低下の多くは学業成績の低下、失敗するのではないかと不安に起因する。また、自己効力感とは当事者にとって理解し易い概念であり、自己効力感上昇の結果、行動が生じることを実感することも可能であることが分かっている（坂野・前田，2002）。一方、性格特性としての Big Five 理論では、性格は 5 つの主要な特性（神経症傾向、外向性、開放性、協調

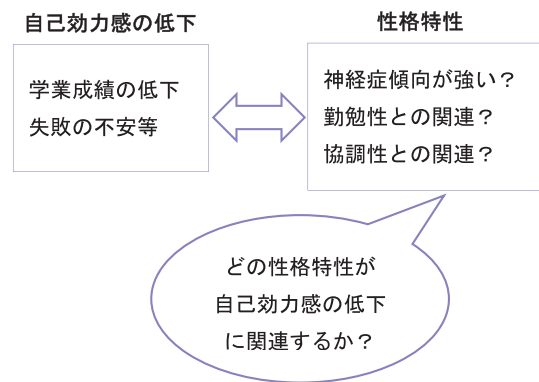


図 1 研究の概念的枠組み

性、勤勉性)に分かれ（小塩，2012）、パーソナリティ特性は児童期から 10 代後半までの変動が大きく、大学生から成人期以降は長期的な変化は示すものの 10 代のような急激な変化は生じない傾向がある（Soto, John, Gosling, & Potter, 2011）。

これらの研究を基に本研究において、自己効力感と性格特性の関連を調査することにする。

研究方法

1. 研究デザイン

調査研究 横断研究

2. 研究期間

X 年 11 月

3. 研究対象者

近畿圏内 A 高等学校衛生看護科 1 年生
生徒 139 名

4. 調査方法

調査対象者には高校の教員より記入方法を説明してもらいその場で回答回収した。

5. 収集データ

① 一般性自己効力感尺度は、kokoronet が販売している、坂野雄二らが作成した「GSES」(General Self-Efficacy Scale) を使用した。本尺度は、「行動の積極性 (7 項目/項目例: どんなことでも積極的にこなす方である)」と「失敗に対する不安 (5 項目/項目例: 何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることがある)」「能力の社会的位置づけ (4 項目/項目例: 人よりも記憶力がよいほうである)」の

3下位因子, 全16項目で構成されている。各項目について、「0. あてはまらない」と「1. あてはまる」の2件法で尋ねた。「失敗に対する不安」は全て逆転項目として取り扱った。本研究においては、「セルフ・エフィカシー合計点」と明記されている「5段階評定値表(採点用紙に添付)を用いて算出した。

② Big Five パーソナリティ(性格)特性は、小塩真司らが作成した「日本語版 TIPI-J」を使用した。本尺度は、「外向性(2項目/項目例:活発で外向的だと思う)」「協調性(2項目/項目例:人に気をつかう、やさしい人間だと思う)」「勤勉性(2項目/項目例:しっかりしていて、自分に厳しいと思う)」「神経症傾向(2項目/項目例:心配性で、うろたえやすいと思う)」「開放性(2項目/項目例:新しいことが好きで、変わった考えを持つと思う)」の5因子、全10項目から構成されていた。各項目について「1. 全く違うと思う」から「7. 強くそう思う」までの7件法で尋ねた。

6. 分析方法

SPSSVer. 29を用いて量的データの解析を行う。本研究は、GSESの5段階評定値とBig Fiveの5因子の相関関係を分析する。

7. 倫理的配慮

本研究に際し、Big Five 性格特性は、日本語版「TIPI-J」の使用を小塩らにメールにて承認を得た。一般性自己効力感尺度は、kokoronetが販売している、坂野らが作成した「GSES」を購入した。又、所属施設の研究倫理審査委員会の承諾を得た(藍短倫2021-003)。調査については、対象校の校長に研究の主旨を文書にて説明し、研究協力の同意を得た。対象となる生徒には、文書にて研究の主旨と目的、プライバシーの保護、調査への参加は自由意志であること及び、調査参加しなくても一切の不利益は生じないことを説明した。

結 果

1. 対象者

研究協力が得られたA高等学校1年生徒139名のうち134名から回答が得られ、同意が得られなかった2名と記載内容に欠損のあった7名を除く125名(但し、性別未記入者は分析に含む)を有効回答として分析した(有効回答率93.3%)。対象者の特性について

は、女子が107名(85.6%)、男子が13名(10.4%)、性別未記入が5名(4.0%)だった。

2. 自己効力感と性格特性の得点(表1)

GSESの5段階評定値表でみると学生の5.7は「3」で自己効力感程度は「普通」であった。Big Five 性格特性は、各々14点満点中、表1に示すとおりである。

表1 自己効力感と性格特性の得点 n=125

項目	平均値(標準偏差)
GSES(合計点)	5.7(3.6)
Big Five 性格特性	
外向性	7.8(2.9)
協調性	9.2(2.6)
勤勉性	7.3(2.7)
神経症傾向	8.9(2.7)
開放性	8.1(2.6)

(有意水準は全て $p < 0.1$)

3. GSESとBig Fiveの相関(表2)

一般性自己効力感とBig Five 性格特性との関連について、スピアマンの相関係数(有意水準は全て $p < .01$)を求めたところ、一般性自己効力感は、外向性.50と比較的強い正の相関がみられた。神経症傾向-.30は弱い負の相関がみられた。

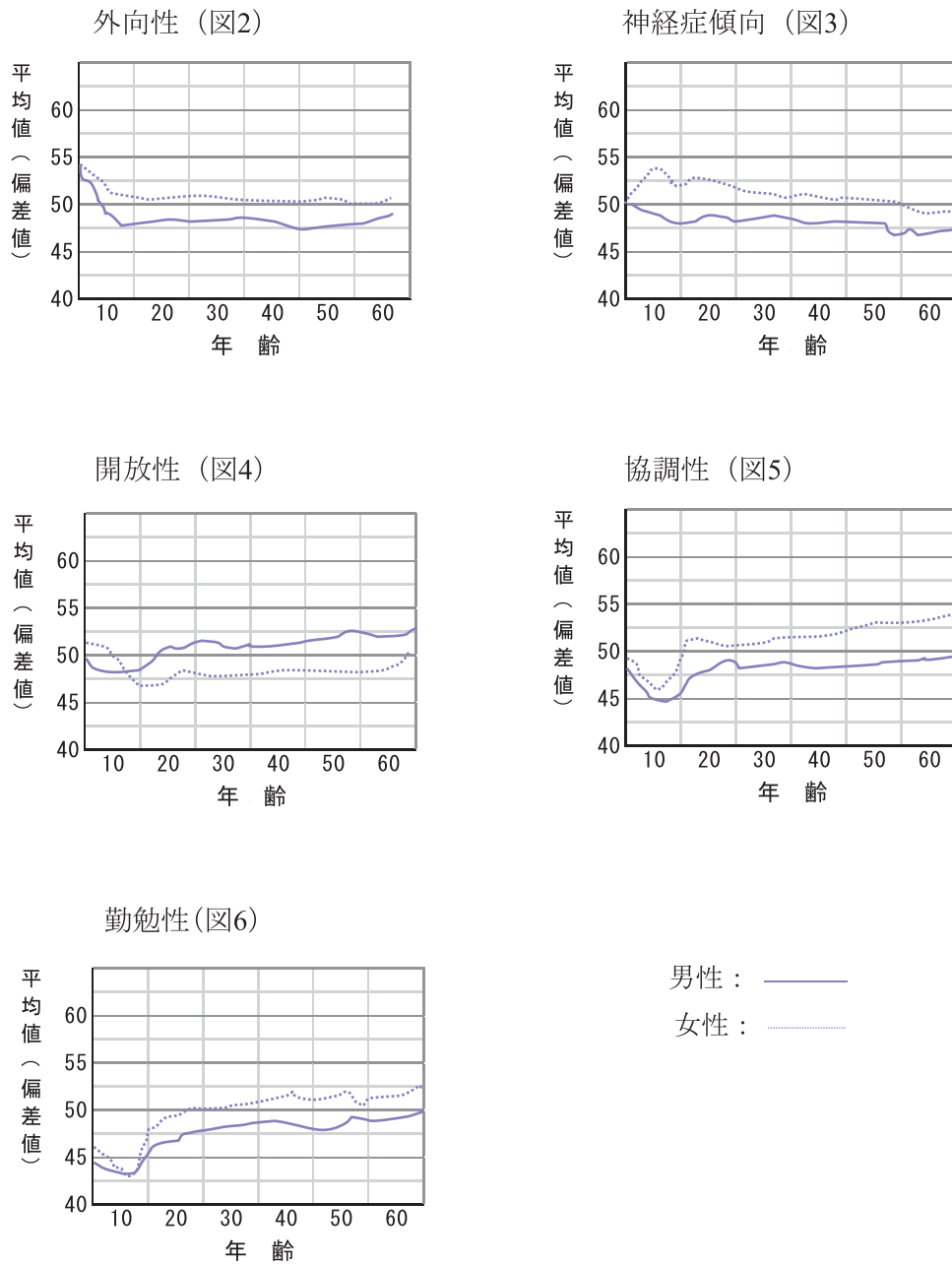
表2 GSESとBig Fiveの相関

	GSES	合計点
Big Five		
外向性		.50**
協調性		.24
勤勉性		.27
神経症傾向		-.30**
開放性		.26

注) **は1%で有意なことを示す

考 察

アメリカの心理学者クリストファー・ソトーらは大規模なデータからBig Fiveの平均値の年齢に伴う変化を導き出している。調査対象は、120万人以上の10歳から65歳までの人たちでありオンライン調査によりデータが収集された(Soto, C.J., 2011)(図2~6)。これらは、ソトーらの論文の結果を小塩により図示されたものである。図の縦軸は偏差値に換算した平均値が示されている。全てのグラフにおいて10歳代の変化の大きさが明らかである。このようにBig Five性



小塩 性格とは何か (2020) より引用

図 2~6

格特性は、年齢に伴い変化を示す (小塩, 2020)。外向性は、10代前半に急激に低下しその後は大きな変化なく経過する。本研究で得た一般性自己効力感との比較的強い正の相関についてもその後大きな変化なく、自己効力感の維持につながるのではないかと考えられる。神経症傾向は女性は10代に上昇し、その後は低下していく。又、男性も10代後半には上昇傾向がみられる。本研究においても自効力感と弱い負の相関がみられたことを視野に入れた指導の重要性が必要である。開放性は、10代で男女の平均値が逆転し、その

後はともに大きく変化することなく上昇していくようである。

国内における Big Five との関連についての研究を概観すると、「健康行動との関連」、「学び・キャリア・パフォーマンスとの関連」、「好み・認知・志向性との関連」等が見られた (平野, 2021)。しかし、一般性自己効力感と Big Five の関連性については、十分に研究されていない。Tellegen ら (1995) は、Big Five の項目に自尊感情に関心の強い臨床家にとって重要な評価的な次元が得られていないことを指摘し、

Big seven モデルを提唱している。Big Five 因子に positive valence と negative valence を加えたものである。外向性はポジティブな感情、神経症傾向はネガティブな感情を経験しやすいことから、positive emotionality 及び negative emotionality と命名している。このことより、Big Five の外向性と神経症傾向は、それぞれ小川ら (2000) の肯定的感情尺度、否定的感情尺度と一定の関連を持つことが示唆される。同時に Big Five と自尊感情の関連も考えられる。

これらをもとに、塗師 (2004) は、Big Five 尺度と自尊感情の関係及び、Big Five 尺度と一般感情尺度の関係を示している。その結果から、自尊感情が高いほど神経症傾向が低く、外向性が高い傾向を示す。外向性が高いほど肯定的感情が高くなり、神経症傾向が高いほど否定的感情が高くなることが示されている。

今回の研究の対象とした衛生看護科1年生における結果より、一般性自己効力感と外向性には有意な正の相関がみられた。これは Big seven モデルにおける positive emotionality、つまり、前向きな感情を経験しやすく自己効力感向上に繋がるのではないかと。又、一般性自己効力感と神経症傾向には弱い負の相関がみられた。これは、Big seven モデルにおける negative emotionality、つまり、後ろ向きの感情を経験しやすく自己効力感の低下・低迷に繋がるのではないかと考える。又、「自己効力感は、操作を加えることによって、高低を変化できることに特徴がある」(Bandura, 1997) ことを鑑み、生徒の個別性を考慮した指導の重要性が示唆された。

今後の検討課題

本研究は、自己効力感と性格特性との関連性の調査という横断研究であった。Bandura (1997) によると、自己効力感は、操作を加えることによりその高低を変化できることに特徴がある。又、Big Five 性格特性は、年齢に伴い変化を示し、特に10代前半から10代後半に大きな波があることが証明されている (Soto, C. J,

2011) (小塩, 1962)。これらのことより、個々の生徒を経時的に追跡する縦断研究の中で、今回認められた性格特性がどのように関係して、一般的自己効力感が変化していくのかについて検討することが必要である。

文 献

- Almagor, M, Tellegen, A & Waller, N. G. (1995). The big seven model: A cross-cultural replication and further exploration of the basic dimensions of natural language trait descriptors. *Journal of personality and social psychology*, 69, 300-307.
- Bandura, A. (1997). Self-Efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavior Change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」(2011)
- 平野真理 (2021). 人格 パーソナリティ研究の動向と今後の展望 —— ビッグ・ファイブ、感受性、ダークトライアドに焦点をあてて —— *The Annual Report of Educational Psychology in Japan 2021*, Vol. 60, 69-90
- 市村賢士郎, 楠見孝 (2019). 課題への取り組みの持続性に及ぼす諦め行動と介入のタイミングの影響 *心理学研究* 2019 年第 90 巻 第 1 号 pp. 1-10
- 柏木繁男, 辻平治郎, 藤島寛, 山田尚子 (2005). 性格特性の語彙的研究 LEX-400 のビッグファイブ的評価 *心理学研究* 2005 年第 76 巻 第 4 号 pp. 368-374
- 塗師斌 (2004). Big Five と自尊感情、感情の関係について *日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集 PA046*
- 小塩真司, 阿部晋吾, カトローニピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み *パーソナリティ研究*, 2012 第 21 巻 第 1 号 40-52
- 小塩真司 (2020). 性格とは何か *中公新書*, 47-62
- 坂野雄二, 東條光彦 (1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み *行動療法研究*, 1986 第 12 巻 第 1 号 73-82
- Soto, C. J., John, O. P., Gosling, S. D., & Potter, J. (2011). Age differences in personality traits From 10 to 65: Big Five domains and facets in a large cross-sectional sample. *Journal of Personality and Social Psychology*, 100, 330-348